



創立40周年を記念して!

登別市・白石市文化協会交流会

2月22・23日の両日、姉妹都市の北海道登別市の文化協会の会員22名が当市を訪れ、当市文化協会との芸術文化の交流を行いました。

これは、登別市文化協会創立40周年の記念事業で、22日に行われたレセプションでは、斎川の孫太郎太鼓や白石市文化協会員の舞踊などで一行を歓迎したほか、翌日には碧水園において、詩吟や尺八など、お互いの芸能活動の発表を行い、文化交流で姉妹都市の親交を深めました。



▲登別市文化協会の黒澤さんによる魚拓の実演 (22日レセプション会場にて)

昔ながらの蔵が装いを新たに

「ギャラリーカフェ 蔵楽」がオープン

2月26日、すまいるひろばに隣接する蔵が、装いを新たに「ギャラリーカフェ 蔵楽」としてオープンしました。



この店は、すまいるひろばと連動して中心市街地ににぎわいを取り戻そうと、白石まちづくり株式会社が蔵を改装してオープンさせたものです。落ち着いた雰囲気の店内は、イタリア料理を中心としたレストランとなっており、市中心部に誕生した蔵の店は、この日たくさんの人でにぎわいました。

和やかにひな祭りを祝いました

武家屋敷で「ひな祭り」を開催

2月24日から3月3日まで、片倉家中武家屋敷「旧小関家」において毎年恒例の「ひな祭り」が開催され、たくさんの人が足を運びました。



▲篠笛奏者の山谷 和さんによる演奏

期間中、武家屋敷では市内の創作グループなどによるひな祭りにちなんだ作品が展示されたほか、最終日の3月3日には合唱や大正琴・篠笛の演奏、図書館読み聞かせボランティアの皆さんによる「おはなしひろば」などのイベントが行われ、訪れた人を楽しませました。

いきいきと活躍できる地域社会に

人権啓発いきいきフォーラム

3月11日、働く婦人の家において、人権啓発いきいきフォーラムが開催され、多くの市民が参加しました。

フォーラムでは、「助け合い」から「学びあい」へと題した基調講演の後、地域の振興や子育てなど、さまざまな分野で積極的に活動されている市民の皆さんがパネラーとなり、パネルディスカッションが行われました。



参加した皆さんは、人と人が結び合う中で他人を尊重し、いきいきと活躍できる地域社会を実現することの大切さを再認識していました。

姉妹都市交流をきっかけに!

白石中学校が海老名市の中学校と交流体験学習

2月24日、神奈川県海老名市の有馬中学校の3年生約170人が当市を訪れ、白石中学校の3年生約130人と市内11カ所の事業所や施設に分かれて体験学習を行いました。

神奈川県海老名市とは姉妹都市として、さまざまな交流を行っています。この姉妹都市交流がきっかけとなり、学校同士の交流活動へと発展したもので、今回の活動は2回目。第1回目は昨年4月、白石中学校の修学旅行の際に、有馬中学校の生徒の皆さんがガイド役となり鎌倉での学



習見学を行っています。

鷹巣の白石和紙工房では、紙すき作業の説明を受けた後、両校合わせて6人の生徒の皆さんが挑戦。厳しい寒さの中での、冷たい水を使った作業に、手を真っ赤にしながら、代わる代わる作業体験を行いました。



また、11カ所中1番の大人数となった弥治郎こけし村でのこけしの制作体験では、両校合わせて約80人が参加。こけしが出来上がるまでの工程を体験し、楽しく白石の伝統産業の素晴らしさを体験しました。

火遊びはしません!!

越河保育園児が地元で火災予防運動を実施

3月7日、越河保育園の園児20名が、春の火災予防週間に合わせ、地元の皆さんに防火に対する意識を高めてもらおうと、火の用心を呼び掛けました。これは、幼年消防クラブを結成している同保育園の恒例行事として、昨年から行われています。

園児たちが拍子木を打ち鳴らしながら、「火の用心、マッチ一本火事のもと!」と元気のいい声で火災予防を呼び掛けると、地元の皆さんも沿道に出て、手を振りながら呼び掛けにこたえていました。



平成18年に入り、異様に火災が多く発生しています。その数は、3月21日現在で8件にのぼります。その大半が、火の不始末や不注意など、普段通り気を付ければ防げた事例ばかりが目立った気がします。本当に「火」は恐ろしいものです。すべてを焼き尽くしてしまっています。物だけでなく、思い出や記録までも…。

子どものころ、近所で火災があり、延焼するのではないかと、思うような怖い体験をしました。燃えさかる炎が家屋に迫ってきました。しかし、我々にはどうしようも無く、ただただオロオロするばかりで、「手も足も出ない」とはこのことかと思われました。その時消防署員と消防団員は、鎮火のため、また、延焼を避けるために果敢に消火活動に努めてくれたこと

風間市長の「義」のナニヤミ

かな?と考えたり…。「消防団」を現代用語の基礎知識で引くと、「地域の安全対策は自然発生的な権利である。水防団、自警団などがそれで、消防団だけが戦前から法定されている。しかし都道府県の管轄だったため、警察や軍(防護団)の協力組織に変容。戦後は

は的確な指示を行いながらも、自らも下働きを行います。また、訓辞のときも、一言一言丁寧に、厳しさに優しさを感じられる言い回し。毎回感じ入っています。そして、それを支える両S副団長。素晴らしい人たちの集団です。白石消防団の皆さん、これから

を覚えています。その姿は、使命感と誇りを持ち、「義」にあふれた勇ましさを醸し出していました。白石市消防団は、団長・副団長2名・本部と8地区の分団、68班、総勢645名で組織されています。

べきすじみち。利害を捨てて条理に従い、人道・公共のために尽くすこと」です。消防団員の皆さんも当てはまるのではないかと思います。そういえば赤穂の義士も、当時の火消しの装束ではなかった

市町村の管轄に移され、ボランティアの消防団を組織した」とありました。現在、その白石消防団の団長がOさんです。「気は優しく力持ち」を地でいく方です。消火の際

もよろしくお願いします。白石の安全と安心のために!

「火の用心! マッチ一本火事のもと!」我々市民も、火の元注意を忘れずに!

話は変わりますが、台所をなぜ「お勝手」といいますか?

